

「韓国人」・「原爆犠牲者」・「慰霊」という三つの問題

山本 昭宏（神戸市外国語大学准教授）

・韓国人原爆犠牲者慰霊碑

韓国人原爆犠牲者慰霊碑については、2023年5月19～21日に広島で開催された先進7カ国首脳会議（G7サミット）をめぐる報道でも話題になったため、ご存知の人も多いだろう。G7サミットの議長国は招待国を選ぶことができるが、日本が選んだ招待国のリストのなかには韓国があった。来広した韓国の尹錫悦大統領は、岸田文雄首相とともに韓国人原爆犠牲者慰霊碑を訪問し、2802人の死没者に追悼の意を表した。韓国の大統領がこの慰霊碑を訪れるのは史上初のことだった。

この碑が建てられた経緯を整理しよう。1960年代に尹炳道（ユン・ビョンド。自身も被爆者、次男を原爆で失う）らを中心に、慰霊碑建立を望む声が起こり、1967年春に当時の浜井信三広島市長に申し入れが行われた。浜井から好意的返事を得たことから、「広島韓国人犠牲者慰霊碑建設委員会（慰霊碑建立委員会と表記する資料もあり）」が結成される。委員長は張泰熙（チャン・テヒ。元・民団広島県本部議長）であり、以後、碑の建設用地をめぐって市と交渉を重ねた。

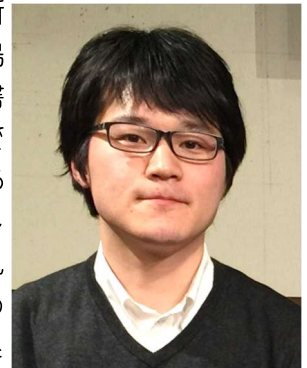
ところが、広島市は平和記念公園内の新たな記念碑・慰霊碑等の設置について、1967年9月以後は許可しないという方針を固めていた。韓国人原爆犠牲者慰霊碑は、1967年9月を過ぎての建設申請だったため、許可されなかった。そのため、建設委員会は平和記念公園のすぐ外にある堺町1丁目での建設を申請し、許可を得ることになった。この場所は広島市堺町一丁目の本川沿いであり、旧韓国王族の李鍋が被爆死した場所だった。

・慰霊碑の「再発見」

1980年代に入って、韓国人原爆犠牲者慰霊碑が平和記念公園の外にあるということが「民族差別の象徴」として認識されるようになる（なお、先駆的にこの問題に注目した事例は、1970年代から存在する。1975年4月1日および4月5日の『中国新聞』の読者欄には、それぞれ「聖域外の慰霊碑に韓国人として疑問」「外国人にも広げよ」という投書が掲載されている）。

当時の新聞への投書をひとつ紹介しよう。1986

年11月14日付の『朝日新聞』には14歳の朝鮮半島出身者の子弟からの投書が掲載されている。そこでは「それは川の向こうにあり、亀の形をしていました。なぜこんなに遠く離れたところにあるのだろうか。〔中略〕広島市の皆さま、韓国人の慰霊碑を平和記念公園の中に入れて下さい。同じ人間として、平和を求める仲間として入れて下さい」と書かれていた。



韓国人原爆犠牲者慰霊碑が注目された背景としては、コリアン・アイデンティティの対立があった。民団と対抗関係にある朝鮮総連が1983年に平和記念公園内に朝鮮人被爆者の慰霊碑を立てるため、広島市と交渉を始めていた。これに対抗するかのよう、民団側も動き出し、1988年には、韓国の金宇相下関総領事（当時）から、広島市長に対して韓国人慰霊碑を平和公園内に移して欲しいという



【図版1】「G7広島サミット 3日目（日韓首脳会談等）」首相官邸 HP、2023年5月21日
https://www.kantei.go.jp/jp/101_kishida/actions/202305/21g7summit_korea.html

要請があった。

さらに、そこに市民運動からの問題提起が重なった。京都在住の会社員O氏（当時41歳）だった。O氏は、1986年9月に広島市に「死者までも差別するのか、同じ原爆による犠牲者までも差別するのか、あまりにも非常識な広島市の処置に心の底

からの怒りを禁じ得ませんでした」という抗議書を送った¹。その後〇氏は朝日新聞に投書し、それが掲載されたことから、この問題が社会の耳目を集めるようになった。

こうして「民族差別問題」と結びつくことになった韓国原爆犠牲者慰霊碑だが、1970年の建立に関わった当事者たちは、これをそもそも「民族差別問題」だとは見なしていなかった。かつて広島韓国人犠牲者慰霊碑建設委員会の委員長だった張泰熙は次のように述べる。「私は公園の外にあることは、恥辱とは思っていない。なぜなら、あそこは李錫公という韓国の宮さんが、被爆した後、助けられた場所だからだ²」。



つまり、韓国原爆犠牲者慰霊碑の空間的配置は、1970年当初は民族差別と見なされないどころか、王族の死という一種の正統性をも備えていた場所であり、広島市当局から建設用地を確保したという成功体験でさえあった。それが、1980年代になって、民族差別の象徴として「再発見」されたのである。

・残された問い

その後の経緯についても、簡潔に整理しておきたい。1990年5月、広島市は韓国人と朝鮮人すべての霊を祭ることを前提に、90年8月までに慰霊碑を公園内に移設することを約束した。つまり、韓国と北朝鮮の「統一碑」というかたちで移設するというのが、広島市の意向だった。しかしながら、統一碑の名前で、今度は民団と総連のあいだに对立が生じる。民団は、統一碑の名称案を「韓国・朝鮮人原爆犠牲者慰霊碑」と提案したが、総連は「『韓国・朝鮮人』という表記は分断の固定化だ」とこれに反対した。総連が出した「同胞原爆犠牲者慰霊碑」などの案については、今度は民団がそれを拒否した。1998年12月には統一碑の建設を断念することが決定。韓国原爆犠牲者慰霊碑として単独での移設が決ま

った。そして1999年7月、平和記念公園内の現在の位置に慰霊碑が移設された。

以上、慰霊碑の建立と社会問題化の過程を辿ってきたが、1980年代の「再発見」をいかに理解すべきだろうか。多様な見解があり得る問題だが、ここでは慰霊碑の「再発見」が遅れたという事実を重視したい。戦後日本にとって、植民地支配の「加害者」としての記憶は、直面したくない負の記憶である。場合によっては都合よく忘れ去られることさえあったその記憶は、しかし、決して消去されることのない記憶であり、人びとが忘れたころに戻って来る記憶である。

韓国原爆犠牲者慰霊碑は1970年から平和記念公園のすぐ外に存在し続けていた。建立主体にとっても、広島市当局にとっても、広く日本社会にとっても、問題視されることはないまま、そこに置かれていた。当たり前のことだが、碑は物理的空間を占めるがゆえに、時間の流れに耐えてそこに存在し続ける。そしてそれゆえに、関与するアクターを変えて「再発見」され、争点化される。朝鮮半島出身者の被爆者という、忘れることができない存在が、1980年代の広島、そして日本社会に遅れてやって来たのである。

エッセイを閉じるにあたって、ひとつの問いを投げかけてみたい。韓国原爆犠牲者慰霊碑が平和記念公園内に移設されることは、果たして本当に「差別の解消」なのか。他の「日本人」たちとともに、あるいは他の原爆被害者たちとともに眠ることを、死者たちが望んでいるのかどうかは、誰にも決められない。慰霊碑の場所が「差別」問題として焦点化されたことで、この問いは問われないままとなった。簡単には答えの出ない問いだが、この問いは私たちに開かれたままである。

注¹ 宋斗会氏を囲む会「『朝鮮』・『韓国』人原爆犠牲者慰霊碑についての抗議並びに要求の書」1986年9月。引用は全国在日朝鮮人教育研究協議会・広島有志、ピカ資料研究所編『資料・韓国原爆犠牲者慰霊碑』碑の会、1989年、55頁。

注² 張泰熙「『碑』建立回想記」全国在日朝鮮人教育研究協議会・広島有志、ピカ資料研究所編『資料・韓国原爆犠牲者慰霊碑』碑の会、1989年、33頁。

【付記】

『中国新聞』の記事閲覧に際しては、中国新聞社論説委員室の宮崎智三さんにご協力いただきました。記して感謝申し上げます。